

## 英語の韻律特性とリスニングの指導

— コミュニケーションメディアとしての音声英語 —

中 村 嘉 宏\*

(1992年10月15日 受理)

English Prosody in EFL Teaching

— English as a Medium of Communication —

Yoshihiro NAKAMURA

外国語(英語)学習初期の段階における音声言語の理解と発表能力の養成が強調されるようになって久しい。この目的に向けて様ざまな試みがなされているが、多くの場合、音声を媒体とする伝達内容の理解力が十分に養成されないまま、発表能力の獲得に力点がおかれ、あたかも、音声英語の学習イコール発表能力の学習とする傾向がみうけられる。言語による意思伝達では伝達内容の理解が前提となっており、理解のない対話の継続は困難である。理解力を伴わない発表力はいわゆる‘classroom English’や‘local English’といわれるように意思伝達能力のごく一部を形成するものでしかなく、音声言語学習におけるこのような跛行的現象は長期的な学習継続への意欲を妨げる要因ともなってくる。以下、教室における聴き取り能力(listening comprehension)の指導・学習という観点から音声英語の諸特性を考え、教室での指導技術の一環として目標言語の韻律特性に関する知識をどのように活かすことができるのかを模索してみたい。

### § I コミュニケーションメディアとしての音声英語 — 発話行為(speech act)

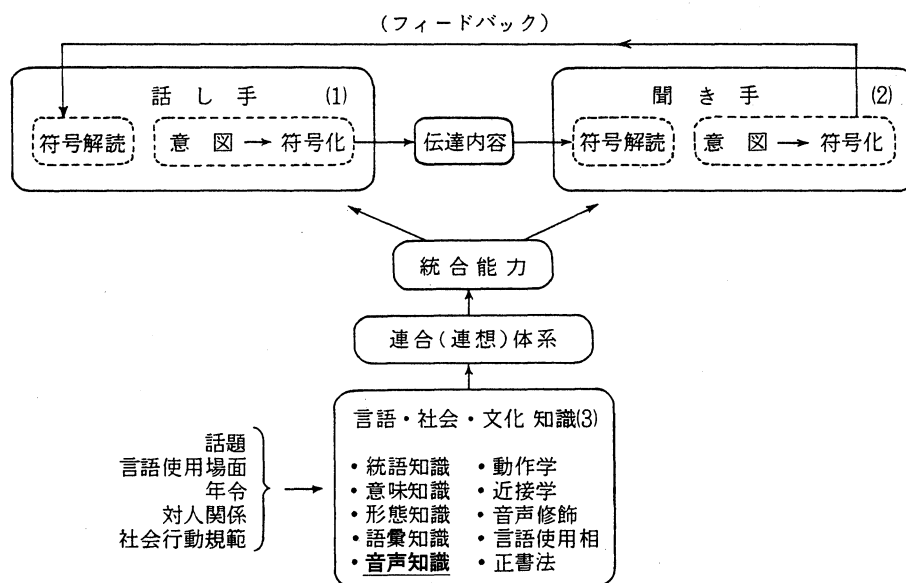
発話行為には心理的実在として社会・文化・言語的に多様な要因が構造的に関与している(図-I参照)。外国語(英語)による発話行為の実現(顕在化)には、このような要因としての知識や技能が内化され、さらに、これらを統合・運用する能力の存在が前提となっており、単に、言語(語彙・構文)に関する項目羅列的な知識の蓄積や暗記に基づく機械的な文型・対話練習だけが発話行為に必要な基礎的能力の習得を可能にする訳ではない。音声英語をコミュニケーションメディアとして

---

\*鹿兒島大学教育学部外国語科

教授・学習の対象とする場合、教授者と学習者が発話行為 (speech act) のプロセスおよびそれに伴う様々な要因について理解を深めてゆくことは、たとえば、学習への動機づけや具体的な教授・学習目標の設定という観点からも大きな役割を果たすものといえる。音声英語の韻律特性 (文強勢、リズム、音調、接続などを含む音声特徴) とその重要性について考えてみる前に、本節では、まず、発話行為 (図-I) のプロセスに焦点をあて、そこから音声英語の教授・学習にどのような示唆が得られるのかを論じてみたい。

図-I  
— 発話行為 —



通常、発話行為には、「話し手」(1)と「聞き手」(2)が存在し、対話の際、「話し手」はある種の情報を伝える意図 (intention) をもち、概念 (idea) として脳裏にある伝達内容 (message) を伝達媒体である言語に記号化 (encode) する。「聞き手」は音声を媒体とする記号化された伝達内容を解読 (decode) し、「話し手」の意図を理解することになる。この過程で、「話し手」は、「聞き手」から得られるフィードバック (feedback) によって、いわば、「聞き手」の理解度について様々な判断の材料を得ることになる。このフィードバックは言語によってなされることもあり、また、身振りや顔の表情などによってなされることもある。まとまった内容の発話が終わるのをまって「聞き手」は「話し手」となり、両者は相互のフィードバックによって伝達内容の正確な理解を確認し、一方で、情報理解のギャップ (乖離) を知覚し誤解を避けようと努力する。「話し手」と「聞き手」の役割は交互に代わり両者の役割が固定したり同時に同じ役割を持つことはない。発話行為を継続する際、「話し手」と「聞き手」が、随時、その役割を交代できることは、両者が心理的に文化・社会・言語知識(3)をある程度または完全に共有していることを示している。母国語習得の場合、韻律特性を含む音声知識が共有知識(3)の構成要素の中でも最も早く確立され、また、情報伝達の媒体

として最も永く記憶保持されることは、外国語教育において音声言語による意思伝達能力の養成を目的・目標とする場合、注目されてよい事実といえよう。

実際の発話行為において、文化・社会・言語知識(3)に影響を与える外的要因として、さらに、図一Ⅰにあるように、「話し手」と「聞き手」の年齢、性別、両者の対人関係、社会的地位、また、「話し手」と「聞き手」が属する文化・社会の伝統的な言語行動規範などが目に見えない要因として作用している。発話行為に関する社会行動規範については、歴史的・文化的背景が色濃く反映し、日本語と英語を母国語とする文化圏では互いに異なった面が存在している。たとえば、集団よりも個により比重をおく英語文化圏では、言語を個人の自己表現、あるいは、自己主張の重要なメディアとして認識する傾向が強く、個性表出とともに言語的論理性が重んじられる。音声英語による意思伝達能力の養成にあたっては、「話し手」と「聞き手」の相互理解を実現する上でこのような言語行動の違いを認識することは、異文化理解の観点から、言語によるコミュニケーションが単に言語だけの問題ではないことを体得する上で学習者にとって大きな意味をもつものといえよう。

発話行為はこのように複雑な内的・外的諸要因について「話し手」と「聞き手」が共通の知識と理解を有することで成り立っているといえるものであるが、発話行為の実現には、図一Ⅰに示すように、個々の要因が内的構造を成し、同時に、これらが相互に構造化した連合(連想)体系を形成する必要があり—この意味で、言語は、いわば、規則に支配された有機的な連合(連想)構造の体系—最終的には、多様な言語使用場面に応じて、総体としての連合体系を機能的に統括する統合能力(言語運用能力)の養成が必要になってくる。

本論では、上記内容を念頭に、音声英語の理解能力を促進する観点から、以下、英語の韻律特性について、とくに、音節構造、リズム特性、強勢の型、音調、および、発話の中でこれらの影響を受けて生ずる分節音の変化の諸相、などについて論じてみることにしたい。

## §Ⅱ 日・英語の音節構造比較

以下の音節構造図(図一Ⅱ参照)は日・英語の基本的な音節構造の差異とそこから生ずる外国語(英語)学習上の様ざまな困難点を示唆している。日・英語の音節構造の違いから日本人学習者にとって音声英語の習得上どのような学習困難が生ずるのかを、以下、両言語の音節構造の分析を基に具体的にみていくことにしたい。

図一Ⅱ  
— 音 節 構 造 —

$$\left[ \left[ \begin{array}{c} \text{音節頭部} \\ \text{副音(子音・半母音)} \\ C(0\sim 3) \end{array} \right] + \left[ \begin{array}{c} \text{音節主部} \\ \text{主音(母音)} \\ V(1) \end{array} \right] + \left[ \begin{array}{c} \text{音節尾部} \\ \text{副音(子音・半母音)} \\ C(0\sim 4) \end{array} \right] \right]$$

言語の音節は、図一Ⅱにみるように、音節主部と音節頭部・尾部(前部・後部)から成り立っている。音節主部を構成するのはソノリティ度(scale of sonority)の原則から常に母音であり(音節主

音となる子音を含む), また, 音節頭部および音節尾部を構成するのは子音と半母音であり, 母音がこれらを構成することはない。音節主部をもたない音節はないが, 音節によっては音節頭部または尾部, あるいは, その両方をもたないものもある。音節尾部をもたない音節は開音節 (open syllable), 音節尾部をもつ音節は閉音節 (closed syllable) と呼ばれている (15: 120-125)。

日本語の場合, 音節主音となる鼻音の /n, ŋ/ を除き — 2重子音 (例: gakko), 子音 (半母音) + 子音 (半母音) (例: bya, cha, gwa, hya, rya など), また, 長母音は1文節と考える — すべて開音節化し, 通常, 1子音 (C) + 1母音 (V) または母音 (V) のみの構成となるが — このため, 日本語は開音節言語と称されることがある —, 英語では音節主音となる鼻音の /m, n/ および側音の /l/ を含め, 開音節と閉音節の両方が存在している (但し, 閉音節が多い)。英語の場合には, また, 音節頭部に3子音, 音節尾部に4子音程度の連続音をもつ語彙があり, このような子音連結 (consonant cluster) は英語に特徴的なものであり, (1子音 +) 1母音の開音節構造をもつ日本語にはみられないものである。子音の配列特性では, この他, 英語の場合, 通常, 同じ調音法の子音による子音連結は生じない, 子音 /ŋ/, /ʒ/ が語頭にくることはない, また /t, d/ + /r/ の子音連結は語頭では生じるが語尾では生じない, /tʃ, dʒ/ + /r, l/ の子音連結は語頭では生じない, などがあり, さらに, 語頭の3子音連結では, 語頭音に /s/, 続いて /p, t, k/ のいずれか, さらに, /l, r, j, w/ のいずれかの子音連続になる (但し, /spw, stl, stw/ は生じず, /skl/ は稀である), などの例をあげることができる。音節におけるこのような日・英語の音素配列の違いから, しばしば, 日本語は母音言語, 英語は子音言語と称されることもある (8: 151-254)。

さらに, 英語に多い例として, 形態素 (morpheme) 間の音声連続を維持するため, 語尾子音と次の語の語頭母音が連結し, 子音が母音の音節へ移動する動的転置 (dynamic displacement) と呼ばれる, 音節の構造上, 一部の例外を除き, 日本語にはみられない音声現象もある (第VIII節第1項参照)。また, 言語リズムとの関連でいえば, 日本語は1つの音節がほぼ同じ時間をかけて発音される音節拍律 (isosyllabism) の特徴をもち, 一方, 英語は, 音節の数とは関係なく, 文強勢間がほぼ同じ時間をかけて発音される強勢拍律 (isochronism) の特徴をもっている (14: 28-43)。日・英語のこのような音節構造やリズム構造の相違およびこれらに起因する音声変化の諸相の複雑さが音声英語を学ぶ日本人学習者にとって大きな学習困難点となってくる。

### § III 音声英語の学習と学習困難点

日本人学習者にとって音声英語習得上の障害となるのは, たとえば, 子音 /l/ - /r/, /f/ - /h/, /v/ - /b/, また, /dz/ - /dʒ/, /s/ - /θ/, /z/ - /ð/ の識別, 長母音 — 同一音素の音量 (sound quantity) が音韻的差異を生ずることではなく, 短母音が長音化したものではない — や二重母音 — 短母音が2個連続したものではなく, 日本語とは異なり, 2音節構成にはならない — を含む母音群の多様さと複雑さ (例 /i:, i, ei, e, æ, u:, u, ou, ɔ:, ɔ, a:, ʌ, ə, ə:, ai, au, ɔi, iə, uə, eə/ 等), などに限らない。個々の音素の識別レベルの他, 音節における分節音配列や言語リズムの違い,

および、特定の音声環境においてこれらとの関連で生ずる並置・非並置的な分節音の変化の諸相など、問題点が多い。たとえば、先にも触れたように、音節拍律言語の特徴をもつ日本語では、音節数が多くなればなるほど発音に要する時間はそれだけ長くなり、逆に、音節数が少なくなればそれだけ発音に要する時間は短くなる傾向があるが、強勢拍律言語の特徴をもつ英語の場合、このような言語リズムはあてはまらない。また、印刷された日本文と英文の比較から分かるように、日本語の場合、英語の正書法とは異なり、単語の前後に余白をとることはない。日本語では、文中の余白は息継ぎを示すものであり、このような日本語正書法の規則を学習者が英語学習にもちこむことで、発音(音読)の際、形態素(morpheme)の区切りを音節の区切りと混同し、個々の単語の前後に短いポーズを入れ、結果的に、強勢拍を特徴とする英語の言語リズムの維持と通常用いられる弱形発音を困難にする一因を成している。

英語の機能語(冠詞、助動詞、人称代名詞、接続詞など)にみられる発音上の強形と弱形の区別は日本語にはないものであり<sup>1)</sup>、言語リズムや流暢さを維持する上で、弱形発音の重要さにもかかわらず、一般に、発音指導・学習の面で弱形への配慮が十分とは思えない(16: 219-226)。日本人学習者の場合、英語の慣例とは逆に、発話において強形を通常発音形態とする傾向があり、この理由として、日本語の正書法による干渉とは別に、日本語の発音自体に強形と弱形の区別がなく、実際的にも概念的にも理解が難しく、言語リズムの点からも学習者には強形の方が聞き取りやすく、また、発音もしやすいという点をあげることができる。この他、日本語の開音節化の特徴に、学習者が英語を発音する際、子音の後ろに母音を無意識のうちにいれて発音したり、英語の音節頭部・尾部における子音連結の聞き取りや発音に困難を感じずる原因を求めることができる。これらの点は、英語の母音の多様さや音声連続における分節音の単純化現象(simplification)と相俟って、日本人学習者が英語を聞いて理解しようとする場合、英語の発話は非常に速く、また、音声も音を飲み込むように曖昧と感ずる原因ともなっており、このようなことは、英語学習にあたって、学習者が母国語(日本語)の音声体系に依存する限り生ずるものである。音声英語の指導と学習に際して、このような観点からも、英語の音節構造や韻律特性を理解する必要性が浮き彫りになってこよう。

#### § IV 英語のリズム単位

日・英語の言語リズムの違いは、基本的には音節依存かまたは強勢依存かで示され、前者は音節拍リズム(syllable-timed rhythm)、後者は強勢拍リズム(stress-timed rhythm)として区別されている。母国語の音節拍律(isosyllabism)に慣れた日本人学習者にとって言語が異なれば音節構造や言語リズムも異なるとの認識は薄く、英語の言語リズムへの聴覚的な適応には強勢拍律(isochronism)の特色を理解した上で、英語母国語話者による自然な発音・発話をモデルとした体系的な聴覚訓練が必要である。以下、まず、英語の母国語話者が心理的に共有し、発話における、いわば、歩調の基本として機能する英語のリズム単位について考えてみることにしたい。

## ①英語のリズム単位——強勢群(stress group)と無音の強勢(silent stress)

英語のリズムは強勢拍律(isochronism)という点で諸家の見方は、ほぼ、一致しているものの(9: 232-244, 1: 86-90, 2: 72-100), 英語のリズム単位については、必ずしも意見の一致はみられておらず、異なった観点から多様な提案がなされている。本項では、英語のリズム単位(rhythm unit)について代表的な2つの視点—強勢群と無音の強勢—を以下に紹介し、各々の内容を概観してみることにしたい。

## ①強勢群(stress group)

強勢音節の前にある弱音節は特に速く弱く発音される。強勢音節の後の弱音節も速く弱く発音されるが、強勢音節の前の弱音節ほどではない。強勢群間の発音時間はほぼ同じになる。1リズム単位は、通常、強勢音節とその前後の無強勢音節から成るが、無強勢音節は無い場合もある(単音節の語が強勢群と同時に、1リズム単位を構成することがある。例1参照)。リズム単位の境界(/)は文法構造や意味内容によって変化するが、語の途中にくることはない(13: 95-100)。

(例1)

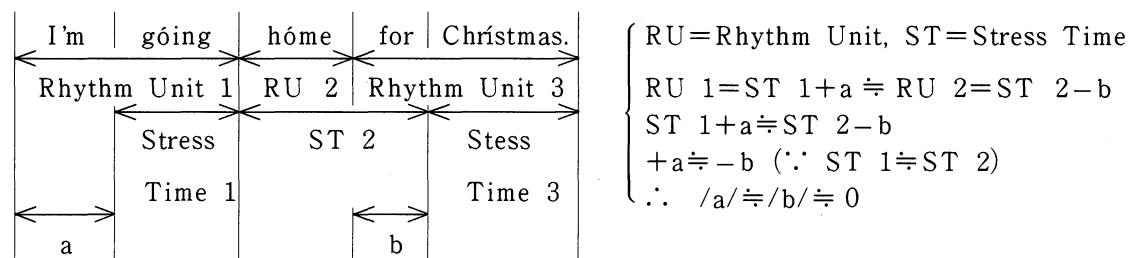
/I'm góing/hóme/todáy./

下線部は強勢群に含まれない。

/I'm góing/hóme/for Chrístmas./

強勢音節のある語, going, home, Christmasがそれぞれ強勢群を構成する。強勢音節の前のI'mとforは特に速く発音される。

(例2)



(例2)は強勢群(stress group)に基づくリズム単位と英語リズムの等時間隔性(isochronism)について両者の関係を図式化したものであるが、上記例は強勢音節の前の無強勢音節(例文ではI'mとfor)が時間的に零に近い速さで発音されることを示している。このことはリズム単位に強勢群の概念を採り入れた①の視点にやや無理があり、強勢音節の前の無強勢音節の取扱いに多少の問題が残ることを示唆している。

## ②無音の強勢(silent stress)

リズム単位は強勢音節の始まりから次の強勢音節の前まで。発話の初めの無強勢音節は最初

のリズム単位の中に含めず、無強勢音節の前に無音の強勢(∧)を想定し、1リズム単位とする。文中における休止も無音の強勢(∧)とみなし、無強勢音節を含め1リズム単位と考える(例1参照)(19: 358-374)。

(例1)

/∧ I should/think it would be/bétter to/wáit till to/mórrrow./

/∧ We'll/stárt im/médiately/∧ if you are/réady./

リズム単位については、先に触れた④の視点が内包する問題点を補足し、発話の初めの無強勢音節の前と休止部に無音の強勢(∧)を想定した⑤の視点が、全体的に無理がなく、英語のリズム特性とも合致しているように思われる。音声英語の聞き取りでは、リズム単位の理解を基に、文強勢が置かれない弱音部の発音法に学習者の注意を喚起し、英語のリズム形態に徐々に慣れさせてゆく必要がある。

## § V 強勢(stress)

第Ⅱ～Ⅲ節では日・英語の音節構造の分析をもとに、両言語の相違点を概観し、英語学習上の困難点を指摘したが、学習困難を引き起こす両言語の基本的な他の相違点に日本語の抑揚(tone)と英語の強勢(stress)がある。日本語では抑揚が音韻的性格をもち、意味の違いを生ずる上で大きな役割を果たしているが、一方、英語では、抑揚とは質的に異なる強勢が音韻的性格をもち、意味の違いやリズムの型を生ずる上で大きな役割を果たしている(3: 192-194)。このような言語的背景から、日常、母国語使用において、強勢の概念を意識することのない日本人学習者の場合、音声英語の学習に際しても、強勢のもつ意義や重要性を見落としがちである。本節では、以下、句(内心的・外心的語群)および文の2つのレベルから、英語の一般的な強勢の型(規則性)について考えてみることにしたい。

### ①句強勢(phrase stress)

句強勢には、複合語(compound word)に適用される内心的句強勢と複数語彙の統語構造に適用される外心的句強勢がある(18: 183-201)。以下、内心的句強勢、外心的句強勢の順に、それぞれの基本型をみてゆくことにしたい(但し、文強勢の基本型と一致しないこともある)。

#### ④内心的句強勢(endocentric phrase stress)

④名詞化した複合語(例1参照)は前の語に強勢が置かれることが多い(例外 *hometown*, *homestretch* など)。但し、形容詞的・副詞的用法をもつ複合語は、多くの場合、後に強勢が置かれ(ハイフンで結ばれた場合には、通常、両方または後の語に強勢が置かれる。例2参照)、単に、修飾語+被修飾語の場合、一般には、後の語に強勢が置かれることが多い。

